

# 会津藩士丸山抱石の書額

## 往生寺(財部)で見つかる

会津藩士の丸山抱石(ほつこく、1817〜98)が戊辰戦争の緒戦となった鳥羽伏見の戦い(1868年1月)で敗れ、紀州に落ち延びた際に命を救ってく

れたお礼として贈った書額が、御坊市湯川町財部の浄土宗往生寺(森川正教住職)で見つかった。丸山抱石は、藩校日新館に学び、書画や詩を好み武



往生寺で見つかった書額

芸にも長じた。家禄500石を継ぎ、学校奉行を務めた。藩主が京都守護職在任中は、京都常話番頭を勤めた。鳥羽伏見の戦いでは幕府軍の主力である会津藩は敗走。丸山も部隊を率いたが、「会津の知将」と称される山川浩ら1800人余りの会津藩士らとともに紀州に落ち延びた。丸山は部隊の藩士らとともに往生寺にたどり着き1週間程度滞在。けがを患った藩士もあり、食事や看護など手厚いほどこしでかくまわれたとみられる。この後紀伊半島を三重経由で会津に戻り、青森の下北郡安渡(大湊)に移住。さらに北海道に渡って、室蘭から札幌に移った。

往生寺で見つかったのは、丸山直筆の書額。縦40センチ、横100センチの大きさ。書に精通していたことから見事な字体で清らかに世俗的でないことを意味する

「清逸」と書かれている。「戊辰上春為 宝永山道人」記されていることから、戊辰戦争時のお礼として宝永山(往生寺)に贈ったことが分かる。「抱石」の下に別名「鎮之丞」とも記し、通称名である「萬年」「抱石」と書かれた落款も押印している。恩義として滞在中に贈ったか、会津に戻ってから贈ったと見られる。

御坊市が、戊辰150周年を迎えた会津若松市に御坊市にある会津藩の資料を寄贈するために森川住職(48)に書額の有無を確かめたところ、森川住職が庫裏の倉庫で見つけた。40年

前まで庫裏に飾っていたが、庫裏の建て替えをきっかけに倉庫に保管していた。森川住職は書額の内容は知っていたものの、実際に見たことはなかったという。森川住職は「見つかったほっとしています。とても貴重なものなのでこれからも大切にしていきたい。御坊の他の方々でも何か会津藩士ゆかりの物が残っているかも知れない。会津若松市と交流が始まるので、これをきっかけに御坊の人が150年前にどのよう

に会津の人たちと関わったのか、分かるようになっていけば」と話している。